青梅市文化財ニュース

第３６３号

平成３０年１月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

湧水施設を大切に～市内多摩川　中・上流域を調べてみて～

私たちが飲んでいる水道水は川の水や井戸の水を原水とし、飲料に適するよう浄水処理を行い配水されています。

蛇口をひねれば当然のように流れ出る水道水を毎日何の不自由もなく利用しているなか、もしもこの水道水が突然利用できなくなったらどうしますか？そんな状況を想定し、今回は大昔の水の供給源をもとに市内の水源を探ってみました。

青梅市の地形は西に寄るほど山地となり、山に降った雨は山間（やまあい）に集まり、それが沢となり川となって多摩川は直接東京湾へ、霞川や成木川は入間川と合流し、荒川に流れ込んで東京湾へ流入しています。

また、沢や川を直接形成せず、地下に染（し）み込んで地中を流れ去る地下水も言わば地下を流れる一つの川として存在しています。

青梅市内の地形は至る所に河岸段丘（かがんだんきゅう）が形成されています。この段丘の崖（がけ）部分を段丘崖（だんきゅうがい）と呼び、古くから湧水の出る場所として知られています。

多摩川沿いの中・上流域を取り上げても、あちらこちらに湧水池やそれに準ずるものと考えられる場所（図１）があります。

なかでも、大柳町の男井戸（おいど）女井戸（めいど）、日向和田の首洗いの井戸、畑中の地蔵院の横井戸、親（おや）井戸、長屋の井戸、柚木町の大舟（おおぶね）の井戸、堂の下の泉、（仮称）ワサビ田湧水、二俣尾のいどばた湧水、滝の川湧水、（仮称）平岡段丘崖湧水などは常に水を湛（たた）えられるように湧水池が設けられています。

この水は、降水した雨などが地下に浸透し、長い時間をかけて流れ出たもので、濾紙（ろし）の役割をする土や砂を通し、樋（とい）の役割をする粘土層（ねんどそう）や岩盤を伝わって流れ出るというものです。場所によっては何年も前に降った雨水が深い地中を延延と流れながら石に触れ、岩盤に触れてその岩の成分を融け込ませながら地表に出てきたというものも考えられます。

また、沢の水を筧（かけひ）などで引いて貯水させ、利用しているところが現在でも、柚木町三丁目や長淵八丁目などで見受けられます。

湧水地の近辺には縄文時代の遺跡も多く、縄文人たちは水量が豊富な川が近くに有りながらも、身近にある湧水を利用していたのではないかと思うところがずいぶん有ります。

現在、宅地化が進む青梅市内では、景観を商品価値とし、崖を崩してマンションを建設したり、今まであった昔からの湧水施設を埋めて宅地にしたりと、多くの水源が消えつつ

あります。しかし、次第に無くなりつつある湧水施設も残しておけば、防火用の水や洗濯などの雑用水、池の水や水槽の水、庭の散水など（飲料水として適格か否かは別として）、いざという時には大きな役割を果たす重要な水の供給源となります。

平成２３年３月の東日本大震災では、市内でも地域的に電気の供給が制限されました。

ガソリンの供給も不便となり、電灯の代わりに蝋燭（ろうそく）を、そして電動式井戸ポンプも利用できず、かつて想像もしていなかった生活へと突然変わりました。

幸いにも青梅では、その期間は短期間であったため、大きな問題へと発展はしませんでしたが、もしも電気のほかに水道が出なくなったらと考えると、もっと大変なことになったでしょう。

昔の人は湧水施設に水神様を祀（まつ）り、穢（けが）れが有ってはならない場所として古くから守ってきました。それほどに重要性を高めた施設は、近い将来、きっと利用する（頼る）時が来るのではないか？といった意識の下（もと）で大切に残されている場所です。

水に不便を感じない毎日を否定的に考えた時の対策は、水を手に入れる場所の存在を知ることです。既存の湧水施設の確認も重要ですし、散歩がてらに、段丘崖から湧水が滲み出ている場所を探すのも、雨後の楽しいひと時となるでしょう。

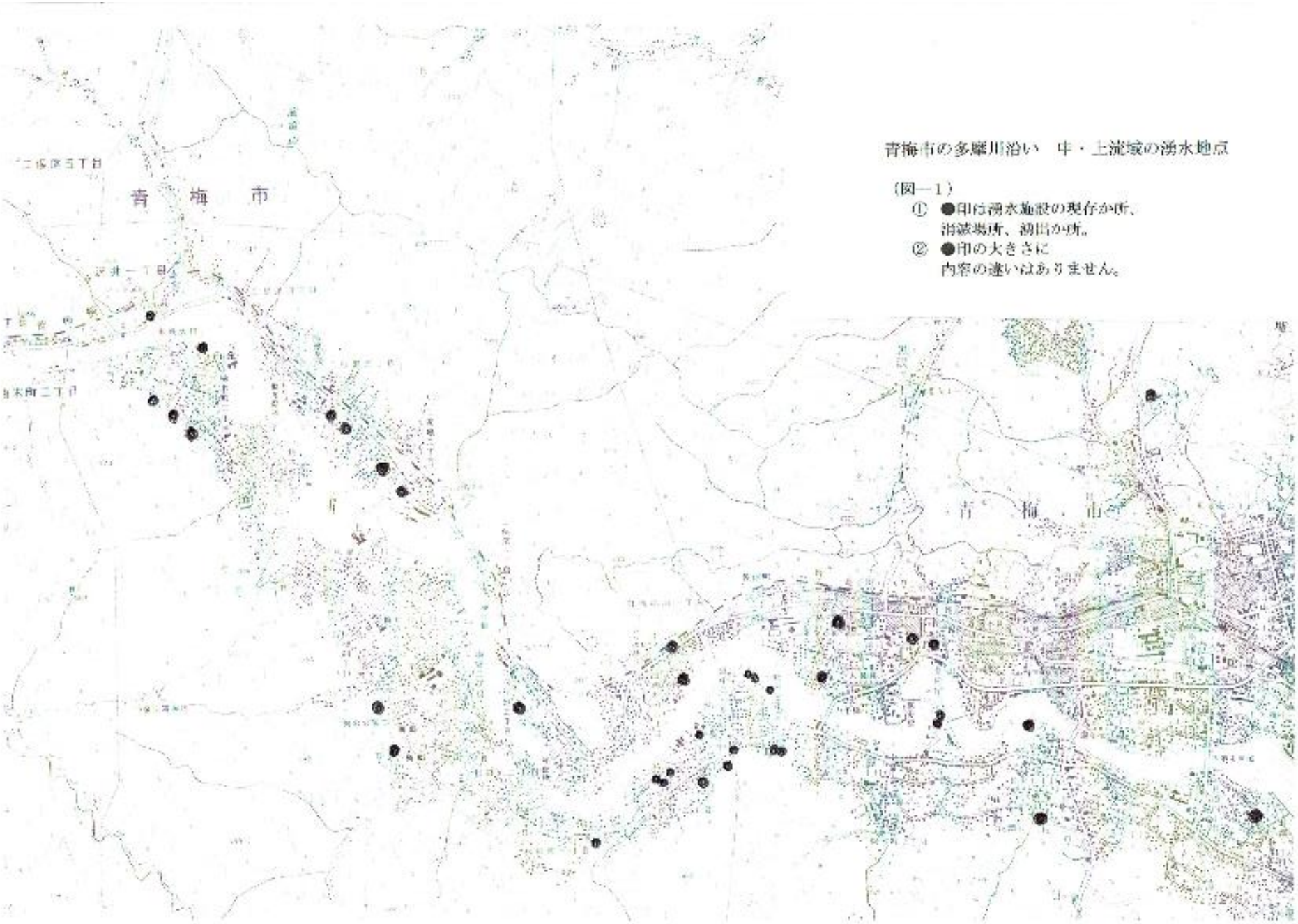
ちなみに、市内のお寺では、長淵三丁目の玉泉寺（ぎょくせんじ）（湧水池）、滝ノ上町の常保寺（北側段丘崖湧水地）、天ケ瀬町の金剛寺（湧水池）、畑中二丁目の地蔵院（段丘崖湧水地（池））、沢井二丁目の雲慶院（うんけいいん）（湧水池）、成木一丁目の安楽寺軍荼利明王堂（ぐんだりみょうおうどう）（西側湧水流入池）などは湧水地を持つ、段丘崖に位置するお寺となっています。参詣が出来るところですので、堂宇（どうう）の見学もしながら湧水地（池）を見て回るのも参考になる事と思います。

昭和 30 年代初頭はまだ水道の普及が一般的では無く、つるべ井戸や手押しの井戸ポンプが主流でした。汲み上げた水は台所に用意した大きな水瓶（みずがめ）に入れ、柄杓（ひしゃく）で汲みながら生活をしていた…そのような時代を記憶している方々も多いことと思います。

そして今日、水道機能一つにおいても大変便利になりました。しかし、場合によっては昭和 30 年代初頭のような生活が一時的に起こるかもしれません。つるべ井戸や手押しポンプは無くても、昔から祀られ守られてきた湧水施設に、人々が殺到するような毎日に変わってしまう可能性は無いとは言えません。

いざという時の頼れる場所として存在する湧水施設の重要性を理解し合い、これからもずっと大切に保存されていくことを深く望むところです。

（文責　鈴木晴也）



青梅市の多摩川沿い　中・上流域の湧水地点

（図－1）

① ●印は湧水施設の現存か所、消滅場所、湧出か所。

② ●印の大きさに内容の違いはありません。